

質問紙調査演習による聴覚障害の特性の 自己理解と自己表現を育むための教育実践

～テキストマイニングを活用した生徒による質問紙の分析～

内野 智仁

聴覚障害の特性について、周囲の人々に対して理解を促すことは勿論のこと、障害者である児童生徒自身の自立に向けた当該内容の自己理解や自己表現の機会を設けることは、インクルーシブ教育システム構築の理念や文部科学省の見解に基づく意義深い教育活動であると考えられる。本研究では、聴覚障害の特性を生徒自ら就職先の人々に説明するという主題をもとに、PowerPoint による発表資料の作成・改善、生徒自作の質問紙を相互に回答して実施する質問紙調査演習、MCGPro を活用したコンテンツ作成の教育実践を行った。また、生徒自作の質問紙の質問項目についてテキストマイニングによる分析を行った。その結果、単語の出現頻度（名詞）及び単語ペアの共起回数で高い値を得た内容が明らかになった。

キー・ワード：障害理解教育 質問紙調査演習 ICT 活用 テキストマイニング

1 はじめに

平成 18 年 12 月 13 日、国連において採択された「障害者の権利に関する条約」の批准に向け、我が国はこれまで「障害者基本法」の改正や「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」を成立させるなど、障害者の権利と尊厳を保護して促進するための取り組みを進めてきた。そして平成 26 年 1 月 20 日、同条約に批准し、141 番目の締約国・機関となった。同条約では、インクルーシブ教育システムを提唱し、その理念推進のために、障害の有無やその他の個々の違いを認め合いながら共に学ぶことを追及すること、誰もが生き生きと活躍できる社会を形成していくこと、障害のある者が一般的な教育制度から排除されないこと、自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な「合理的配慮」が提供されること等の必要性を指摘している。

この合理的配慮について文部科学省は、各学校における合理的配慮の具体的内容について検討するため、特別支援教育の在り方に関する特別委員会の中にワーキンググループを設けた。その報告（文部科学省、2012）では、聴覚に障害のある児童生徒を対象とした、教育内容及び方法の配慮事項について、

以下の項目を例示している。

- ・ 言語経験が少ないことによる、体験と言葉の結び付きの弱さを補うための指導をする。
- ・ 自己選択及び自己判断の機会を増やす。

また、文部科学省（2016）は、特別支援教育及び聴覚障害教育について紹介する公式ホームページにおいて、基礎学力の定着を図るとともに、書き言葉の習得や抽象的な言葉の理解に努めたり、さらに、発達段階等に応じて指文字や手話等を活用したり、自己の障害理解を促したりするなど自立活動の指導にも力を注いでいることを紹介している。

更に、障害者の就労におけるコミュニケーション支援として、本人及び職場に対する障害理解の支援を目的に、作業評価を通して自己の障害理解の支援を行う研究も行われている（馬屋原ら、2000）。

上記内容から、周囲の人々の障害理解を促すことは勿論のこと、障害者である児童生徒自身の自立に向けた自己理解や自己表現の機会を設けることの重要性が明らかにされている。

その一方で、聴覚障害者である生徒を対象とする障害特性の自己理解や自己表現を育む活動について、先行研究が乏しい現状があり、今後多くの実践研究が行われ、成果が蓄積されていくことが望ましい。

2 研究目的

聴覚障害者である生徒を対象に、障害特性の自己理解と自己表現を育む教育実践を行う。本研究の指導では、生徒自作の障害に関する質問紙に回答し合うこと、個々に集計結果を分析すること、成果を発表し合うことを通して、聴覚障害に関する自己理解を促し、自己表現力を高めることを目的とした。

3 本研究で実施した教育実践の概要

(1) 教育実践の方法

高等部専攻科ビジネス情報科1年生と造形芸術科1年生の共通教育科目「情報デザイン」を履修する生徒10名を対象に行った。使用教室は、生徒に一台ずつのパソコンが割り当てられる演習室を使用した。授業は週2単位時間で実施しており、本実践は平成28年の9月から11月にかけて実施した。

(2) 教育実践の内容

1週目の授業では、授業者から以下の説明や指示を行った。

- ・ 卒業生が上司の依頼で自らプリントを作成し、職場の方々を対象に聴覚障害に関する理解を深める取り組みを行っている事例を紹介した。
- ・ 職場の方々と円滑にコミュニケーションを図るため、そして自分自身の能力を最大限発揮するためには、聴覚障害について理解を得ることや働く上で協力して頂きたいことなどを自ら説明できることが大切であることを説明した。
- ・ 上記内容を踏まえて本時からの授業で、聴覚障害や自らの特性を就職先で説明することを想定した発表資料の作成とデジタルコンテンツ作りを行うことを説明した。
- ・ 最終的に作成する予定のデジタルコンテンツの形式について提示し説明した。
- ・ 発表資料はMicrosoft社のPowerPoint、デジタルコンテンツはテクノブロード(株)のMCGProをそれぞれ使用して作成することを説明した。
- ・ 残りの時間で発表資料作りを各自進めること、そして本時中に作成したファイルは作成途中の



図1 生徒相互に表現力を高め合う活動の様子

ものを含めて授業用共有フォルダに提出することを指示した。

2週目の授業では、授業者から以下の説明や指示を行った。

- ・ 前回に続いて、発表資料作りを1単位時間行うこと、その後は作成途中のPowerPointファイルを使って生徒相互に自己表現力を磨く発表活動(図1)を行うことを指示した。
- ・ 本時に作成したファイルは、すべて授業用共有フォルダに提出することを指示した。

3週目の授業では、授業者から以下の説明や指示を行った。

- ・ 発表資料の説得力を高める一つの手法として、円グラフや棒グラフなどで表現する統計情報を活用する方法があること、統計情報を得るために自ら質問紙を作成し集計する方法があることを紹介し、今回取り組むことを説明した。
- ・ 本授業には生徒10名が参加していることから、自分を除く生徒9名を対象に聴覚障害の理解を深める材料となる質問紙を作成することを説明した。その上で、今回作成する質問紙の条件として質問項目は一人あたり6個になること、質問項目への回答方法は「1:まったくそう思わない~5:とてもそう思う」のどれかを数値で記入してもらうことを説明した。
- ・ 質問項目を検討するための活動として、ブレインストーミング及びグルーピングで情報を生成し整理する手法があることを説明した。そして実際に生徒同士で取り組むことを指示した。



図2 ブレインストーミングで付箋に記入する様子



図3 各自の付箋をグルーピングでまとめる様子



図4 各グループの成果を発表し意見共有する様子

- 生徒に一人ずつ付箋を配布して現時点で質問したい内容について記すように指示した（図2）。その後は生徒10名を3グループに分けてA3用紙を配布し、グループ毎に付箋の説明とA3用紙上での分類を指示した。分類のまとめにはグループ名を名付けて視覚的に分かりやすく説明しやすくするように指示した（図3）。
- ブレインストーミング及びグルーピングの成果をグループ毎に発表して相互の意見を共有する

ことを指示した（図4）。

- 質問紙のフォーマットを配布し、質問項目6個を自分自身の意見やグループ活動をもとに検討及び作成してくることを指示した。

4週目の授業では、授業者から以下の説明や指示を行った。

- 各自の質問紙を授業者が点検し指導を行った。
- それぞれの質問紙を生徒内で循環させて、お互いに回答し合うように指示した。
- 生徒自身の手元に戻ってきた質問紙に対する回答結果を、Microsoft社のExcelに入力させ、関数を使って集計する方法を伝達した。また集計結果から円グラフを作成する方法について説明し、調査結果の概要を個々に発表するための資料としてPowerPointファイルを作成するように指示した（図5）。今回の成果は、聴覚障害や自らの特性を就職先で説明する資料に活用できることを説明した。
- 質問紙調査の概要について、生徒一人ずつPowerPointファイルを使って発表して、結果を相互に共有することを指示した（図6）。
- 各自の発表は、自己表現力を高めることを目的に、Apple社のiPadで動画記録して発表生徒にファイルを配付することを説明した。
- 発表終了毎に、生徒同士で表現力を評価するために、授業者がウェブ上に準備した表現力評価シートを入力・投稿することを指示した。結果は後日、発表生徒に配付することを説明した。

5週目の授業では、授業者から以下の説明や指示を行った。

- 前回の発表での評価結果や発表時の動画をもとに、PowerPointファイルの改善を指示した。
- テクノブロード(株)のMCGProの使い方を説明してデジタルコンテンツを作成すること（図7）、そして自己表現力を高めることを指示した。
- これまで個々に作成を進めてきた聴覚障害の特性を就職先で説明することを想定した発表資料に、質問紙調査の結果を加えてPowerPointファイルを完成させることを指示した。



図5 質問紙の回答を集計してグラフ作成する様子



図6 質問紙調査の概要を互いに発表し合う様子



図7 生徒が作成したデジタルコンテンツの一例

4 テキストマイニングによる質問紙の分析

参加生徒 10 名が作成した質問紙の質問項目計 60 個をテキストマイニングツール（株式会社ユーザーローカル製）を使用して分析した（図 8、図 9）。

その結果、単語の出現頻度（名詞）では、「健聴、コミュニケーション、障害、手話、聴覚障害者、…」の順にスコアが高かった。

また単語ペアでは、「コミュニケーション・健聴、必要・思う、思う・情報保障、手話・視線、…」などが共起回数のスコアで上位となった。

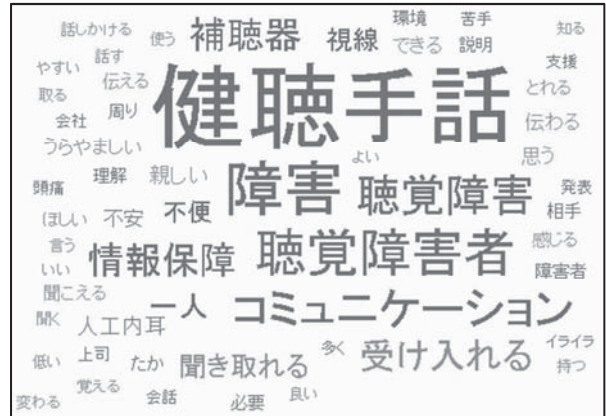


図8 テキストマイニングによる単語の出現頻度図

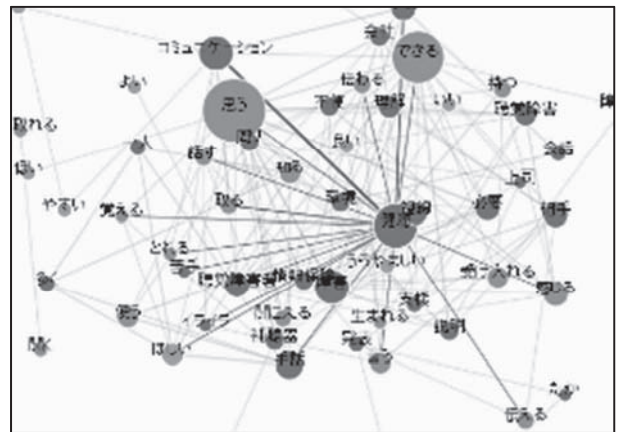


図9 テキストマイニングによる共起ネットワーク

5 まとめ

本稿では、障害の自己理解・自己表現を高める教育実践とテキストマイニングの分析結果を報告した。詳細な教育効果等は別途報告を予定している。

〔参考文献〕

馬屋原邦博・筒井優（2000）失語症者の就労におけるコミュニケーション支援，第 26 回日本聴能言語学会学術講演会特集，17-3，186。
 文部科学省（2012）合理的配慮等環境整備検討ワーキンググループ報告，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/046/attach/1316184.htm，参照 2016 年 12 月 1 日。
 文部科学省（2016）特別支援教育について（2）聴覚障害教育，http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/004/002.htm，参照 2016 年 12 月 1 日。